

第二十一回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

岡谷 公二 著

『南海漂蕩 ミクロネシアに魅せられた土方久功・杉浦佐助・中島敦』

(2007年11月29日 富山房インターナショナル 刊)

岡谷 公二 おかや こうじ 昭和4年(1929)生まれ。東京都出身。

専攻は、フランス文学・美術史。東京大学文学部美学美術史学科卒業。跡見学園女子大学名誉教授。著書は、『柳田国男の青春』、『島の精神誌』、『アンリ・ルソー 楽園の謎』、『神の森 森の神』、『南海漂泊 土方久功伝』、『郵便配達シュヴァルの理想宮』、『南の精神誌』、『絵画の中の熱帯 ドラクロアからゴーギャンへ』ほか、訳書にポール・ゴーギャン『タヒチからの手紙』、ミシェル・レリス『幻のアフリカ』、レーモン・ルーセル『アフリカの印象』、同『ロクス・ソルス』他がある。

受賞のことば

拙著『南海漂蕩』に大変名誉ある賞を授けて下さり、深く感謝しております。

私は若いころから南という方角と島という空間を好み、主として沖縄の島々を旅し、そのかたわら、日本人と南方との関係に思いを致してきました。西欧にはゴーギャンをはじめとして南方と深くかかわり、その地ですぐれた仕事をした画家、作家、詩人が数多く存在するのに対し、沖縄という亜熱帯の島々を国土の中にもち、戦前は台湾と南洋群島をその治下に置いていたのに、日本にはそうした人々が、少くとも戦前まではほとんどおりませんでした。拙著の中でとりあげた土方久功、杉浦佐助、中島敦の三人は、その稀な存在です。中でも杉浦佐助は、南方で生き、そして死んだ日本唯一の芸術家と言ってよいと思います。もと宮大工の、これまで全く無名だったこの特異な彫刻家が、拙著の受賞を機に多くの方々知られるようになれば、それは、小生にとって望外の幸せです。

《選考委員評》

陳 舜臣

土方久功、杉浦佐助、中島敦の三人は、いずれも戦前に南洋群島に赴き、そこに居を据えたことのある芸術家である。土方は十三年、中島はわずか半年余り。そしてもう一人の杉浦は、大正六年にパラオに渡ってから、昭和十九年に四十七歳で不慮の死を遂げるまで、その大半の時期を南洋で過ごした。

本書は三人の南洋での生活を再現しつつ、彼らの創作、ひいては彼らの生そのものにおける南方行の意味を探究した評伝である。日記等の浩瀚な資料にバランスのとれた分析を加えたうえで、対象への批判的視点も交えて丁寧に書き上げている点に好感を持った。

作品がわずかしか現存していないために、これまでほとんど知られることのなかった彫刻家・杉浦佐助に関する評伝は、生い立ちから南洋渡航にいたる経緯、さらには土方久功との出会いと交流を淡々と記述しているにもかかわらず、読者を引きつけて離さない迫力がある。

中島敦については、彼のような研究しつくされた感のある作家でも、本編を読むとこれまで分からなかった点が少なくないと感じた。

巻頭の「南方行の系譜」は、西欧に比べて日本における南方志向がいかに稀薄であったかを指摘し、ふたつの文明の違いを鋭く突いた考察である。ゴーギャンをはじめ、自身の文明を激しく否定した西欧の画家や文人にとって、南方行は精神の再生をはかる異郷への旅だった。ところが日本人にとって、「南方行は原郷へ帰るといふ趣さえ呈する」という。

日本文化の基層に、南方と連続する要素が濃厚に存在することは、これまでも様々に論じられてきた。本書は戦前の南洋に渡った日本人の評伝をとおして、近代日本人の精神のありようを見事にとらえた作品である。

## 梅原 猛

今回の五点の候補作のなかでいちばん私の心を打ったのは、岡谷公二氏の『南海漂蕩』であった。

岡谷氏はここで一つの問いを出す。西洋には画家のポール・ゴーギャンをはじめ、近代西洋文明を嫌悪し、南方に樂園を求めた芸術家が多々いるが、日本にはそのような人が甚だ少ないのはなぜか。この問いには、日本人は近代西洋文明を理想の文明としてとり入れたので、そのような文明についての深い懐疑をもつことが少なかったからであるという答えが返ってくるであろう。

岡谷氏はその答えを受け入れながら、しかし少数ながら南の国に樂園を求めた思想家、芸術家がいると述べ、そのような人間として土方久功、杉浦佐助を挙げる。ここで岡谷氏が南方の国というのはタヒチなどではなく、日本の委任統治領となっていた、ミクロネシア諸島からなるパラオ共和国である。

私は土方久功についても杉浦佐助についても何も知らなかったが、岡谷氏はみごとに彼らの人生の明暗を示してくれる。華族の出身で東京美術学校の彫刻科を卒業したいわば美術界のエリートでありながら、ゴーギャンに憧れてパラオに出かけた土方は、パラオの民俗に甚だ興味をもち、芸術家とともに民俗学研究者になる。そしてこの土方の影響によって、大工であった杉浦佐助も大変ユニークな彫像を作る彫刻家になる。

この二人の人生の叙述も甚だ興味深いが、何といてもこの書の圧巻は、最晩年における中島敦のパラオ行きについて書かれた部分である。健康を害していた中島敦が、太平洋戦争の前夜であり甚だ危険の存在していた時期になぜパラオへ行って、そこで何を見たのか。この書によって死を前にした中島敦の孤独な姿が浮かび上がってくるが、今後、岡谷氏がこの点に光を当てながら、新しい中島敦論を書かれることを期待したい。

## 山折 哲雄

戦前、南方に魅せられた人間は、北方の中国大陸に夢を託そうとした野心家たちにくらべて微々たるものだった。その数すくない三人の彫刻家・作家をとりあげ、かれらの人生とその内なる魂の軌跡を歴史の舞台の上に浮かびあがらせた労作である。

一人が、宮大工出身の、ほとんど無名に近い彫刻家の杉浦佐助。結婚と離婚をくり返し、ミクロネシアの離島を転々とし、エネルギーにみちあふれる妖怪じみた作品を彫りつけて、あの高村光太郎をして「恐るべき芸術的巨弾」といわしめた。だが、戦争末期米軍の来襲のなかで不慮の死をとげる。

もう一人。教師の職を投げ捨て、内地の鬱屈した空気を嫌って「南洋」に飛び出した中島敦。「山月記」や「李陵」の作品で知られる有名な作家である。ゴーギャンやスティーブンソンの人生にあこがれて南海を漂うものの、幻の流浪を重ねただけで失意のうちに本土に舞い戻る。

三人目が、右の二人のそばにあって、ときに芸術仲間としての胸襟を開き、ときに生活上の助力者となった土方久功。伯爵家出身で東京美術学校の彫刻科を出たのちゴーギャンのつよい影響をうけ、十四年間にわたる南洋生活を送った。彫刻や絵画の外、現地における民族誌的世界の発掘にフィールドワーカーとしての情熱を傾け、戦後まで活動をつづけた。

本書はこの土方という包容力のある人物を軸として、杉浦、中島とのそれぞれ人間味あふれる交流を描き出し、南島に生きた人間たちの赤裸な人生を克明に再現することに成功している。かつて柳田国男は『海上の道』を書いて日本人の原像を追跡しようとしたが、それにたいして著者はその現代における末裔たちの姿を海のかなたにかいまみようとしているかのようだ。ただ、ゴーギャンやスティーブンソンが西欧の「近代」に絶望して「南方」に逃避したのにたいし、本書の主人公たちにはそのような「近代」拒否の姿勢がみられない、と批評しているところが印象にのこった。